『論語私存』訳注（十四）

水野　実・阿部光麿・大場一央・松野敏之　編

凡例

・底本は、北京市国家図書館蔵『四書私存』（明嘉靖二十二年刻本）を用いた。
・原文において判読出来ない字は□で表記した。
・書き下しにおいて、『論語』本文における□は〔　〕で示した。
・書き下しにおいて、季本注における□は、類推できる場合は〔　〕で示し、校異を附した。
・季本『説理会編』は、清華大学図書館蔵明馮継科刻本（四庫全書存目叢書所収）を用いた。
・校異および解釈には、朱湘鈺 点校、鍾彩鈞 校訂『四書私存』（中央研究院中国文哲研究所、二〇一三年六月。以下、校本と称す）を参考として用いた。

論語私存卷十七

陽貨第十七

會稽季本箋釋

【一】

陽貨欲見孔子。孔子不見。歸孔子豚。孔子時其亡也、而往拜之。遇諸塗。謂孔子曰、來、予與爾言。曰、懷其寶而迷其邦、可謂仁乎。曰、不可。好從事而亟失時、可謂知乎。曰、不可。日月逝矣、歲不我與。孔子曰、諾。吾將仕矣。

陽貨見孔子、説見孔子圖譜。集註謂必時其亡而往拜者欲其稱也、則聖人近於計較之私矣。蓋不欲見之、故亦時其亡耳。

［訓読］

陽貨、孔子を見んと欲す。孔子見ず。孔子に豚を帰る。孔子其の亡きを時として、往きて之を拝す。諸に塗に遇へり。孔子に謂ひて曰く、来たれ、予爾と言はん、と。曰く、其の宝を懐きて其の邦を迷はす、仁と謂ふべきか、と。曰く、不可なり、と。事に従ふを好みて亟しば時を失ふ、知と謂ふべきか。曰く、不可なり、と。日月逝く、歳、我と与ならず。孔子曰く、諾。吾将に仕へんとす、と。

陽貨、孔子を見るは、説、孔子図譜に見ゆ。集註、必ず其の亡きを時として往きて拝するは、其の称

はんことを欲するなりと謂ふは、則ち聖人、計較の私あるに近からん。蓋し之を見るを欲せず、故に亦た其の亡きを時とするのみ。

［語釈］

○孔子圖譜　元・孔沢編。孔沢は仙源（今の曲阜）の人、孔子五十三代の子孫という。元の大徳年間（一二九七―一三〇七）に刊行されたが、現在は佚書となる。

○集註～欲其稱也　『論語集註』陽貨・1章。

【二】

○子曰、性相近也。習相遠也。

性本不遠於我、故曰近。非以氣質之性善惡不同、而其初不甚相遠也。自近對遠而言、則離道乃爲遠耳。詳見説理會編卷一。

［訓読］

○子曰く、性は相ひ近し。習ひは相ひ遠し、と。

性は本より我に遠からず、故に近しと曰ふ。気質の性の善悪同じからずして、其の初め甚だしくは相ひ遠からざるを以てするに非ざるなり。近きより遠きに対(む)かひて言へば、則ち道を離れて乃ち遠きと為すのみ。詳しくは説理会編巻一に見ゆ。

［語釈］

○以氣質之性善惡不同而其初不甚相遠　『論語集註』陽貨・2章。

○詳見説理會編卷一　『説理会編』巻一・47条において、季本は『中庸』冒頭の「天命を之れ性と謂ふ」を前提に「性は只だ是れ天命」、「天命の外に所謂気質の性無し、但だ理の主と為らずして後に気質に堕するのみ」といい、本章の注釈と同様、本然の性と気質の性とを分ける朱子の性説を批判する。その上で『論語』本章を挙げて「性、本より人に遠からず、但だ人自ら之に遠ざかるのみなるを謂ふ。聖人の語意は迫らず、凡そ己に切なる者は皆近しを以て之を言ふ」、と「近し」の用法を指摘し、類例として『中庸』の「道は人に遠からず。人の道を為して人に遠ければ、以て道と為すべからず」を引いている。

【三】

○子曰、唯上智與下愚不移。

不移者、傳習錄所謂不肯移也。

［訓読］

○子曰く、唯だ上智と下愚とは移らず、と。

移らずとは、伝習録の所謂肯て移らざるなり。

［語釈］

○傳習錄所謂不肯移　『伝習録』巻上・111条に「是れ移るべからずんばあらず、只だ是れ肯て移らず」とある。

［校異］

○上智　校本は「智」を「知」に作る。

【四】

○子之武城、聞弦歌之聲。夫子莞爾而笑曰、割鷄焉用牛刀。子游對曰、昔者偃也聞諸夫子。曰、君子學道則愛人、小人學道則易使也。子曰、二三子、偃之言是也。前言戲之耳。

小邑可以臥治而使之足民、雖不以禮樂、可也。故曰、割鷄焉用牛刀。道即謂禮樂也。○子游以文學名者也、觀武城之治、可以見其化民成俗之實用。非止講求文義而已。

［訓読］

○子、武城に之き、絃歌の声を聞く。夫子莞爾として笑ひて曰く、鷄を割くに焉んぞ牛刀を用ひん、と。子游対へて曰く、昔者（むかし）偃や諸（これ）を夫子に聞けり。曰く、君子、道を学べば則ち人を愛し、小人、道を学べば則ち使ひ易し、と。子曰く、二三子、偃の言是（ぜ）なり。前言は之に戯れしのみ、と。

小邑は以て臥治して之をして民に足らしむべく、礼楽を以てせずと雖も、可なり。故に曰く、鷄を割

くに焉んぞ牛刀を用ひん、と。道は即ち礼楽を謂ふなり。○子游は文学を以て名ある者なるも、武城の治を観れば、以て其の民を化し俗を成すの実用を見るべし。止だ文義を講究するのみに非ず。

［語釈］

○子游以文學名者也　『論語』先進・2章に「文学には子游、子夏」と名が挙がる。

○化民成俗　『礼記』学記に「君子如し民を化し俗を成さんと欲せば、其れ必ず学に由らんか」とある。

【五】

○公山弗擾以費畔。召。子欲往。子路不悦曰、末之也已。何必公山氏之之也。子曰、夫召我者、而豈徒哉。如有用我者、吾其爲東周乎。

弗擾即不狃、依陽貨以爲亂者也。詳見孔子圖譜。如有用我者、重在用字。或重我者、謂不召他人而召我也、則與豈徒哉之意不協。吾其爲東周乎、謂周道興於魯、即周在東矣。或以爲當爲西方之周之世、不爲東遷之周、則太輕東周而無含蓄、不似聖人之言矣。

［訓読］

○公山弗擾、費を以て畔く。召す。子往かんと欲す。子路悦ばずして曰く、之くこと末(な)きのみ。何ぞ必ずしも公山氏に之れ之かん、と。子曰く、夫れ我を召す者にして、豈に徒(いたづ)らならんや。如し我を用ふる者有

れば、吾其れ東周を為さんか、と。

弗擾は即ち不狃にして、陽貨に依りて以て乱を為す者なり。詳しくは孔子図譜に見ゆ。如し我を用ふる者有ればは、重んずるは用の字に在り。或ひと我を重んずる者、他人を召さずして我を召すと謂ふは、則ち豈に徒らならんやの意と協はず。吾其れ東周を為さんかは、周の道、魯に興せば、即ち周の東に在るを謂ふ。或ひと以て当に西方の周の世と為して、東遷の周と為すべからずと為すは、則ち太だ東周を軽んじて含蓄無く、聖人の言に似ざらん。

［語釈］

○不狃　『春秋左氏伝』定公五年。

○孔子圖譜　佚書。本篇第一章の［語釈］参照。

○周道興於魯　『論語集解』に「周の道を東方に興す。故に東周と曰ふ」とある。

［校異］

○子路不悦曰　校本は「悦」を「説」に作る。

○弗擾即不狃　底本は「狃」を行人偏に作る。校本に拠って改めた。

○與豈徒哉之意不協　底本は「協」を「恊」に作る。校本に拠って改めた。

【六】

○子張問仁於孔子。孔子曰、能行五者於天下爲仁矣。請問之。曰、恭寛信敏惠。恭則不侮、寛則得衆、信則人任焉、敏則有功、惠則足以使人。

五者皆仁之施、而子張之學至此必已從政、而學亦務實。故告之以此。詳見説理會編巻十二。

［訓読］

○子張、仁を孔子に問ふ。孔子曰く、能く五者を天下に行ふを仁と為す、と。之を請ひ問ふ。曰く、恭寛信敏惠なり。恭なれば則ち侮られず、寛なれば則ち衆を得、信なれば則ち人任じ、敏なれば則ち功有り、惠なれば則ち以て人を使ふに足る、と。

五者皆仁の施にして、子張の学此に至りて必ず已に政に従ひて、学も亦た実を務む。故に之に告ぐるに此れを以てす。詳しくは説理会編巻十二に見ゆ。

［語釈］

○詳見説理會編巻十二　『説理会編』巻十二・11条では、子張に対する孔子の発言の変化について、子張の学の進展に応じたものとして整理し、「此れ亦た聖人の教の等を躐えざるを見るべし」と結んでいる。

【七】

○佛肸召。子欲往。子路曰、昔者由也聞諸夫子。曰、親於其身爲不善者、君子不入也。佛肸以中牟畔。子之往也、如之何。子曰、然、有是言也。不曰堅乎、磨而不磷。不曰白乎、涅而不緇。吾豈匏瓜也哉。焉能繫而不食。

佛肸、趙鞅之家臣。因鞅畔而亦畔。故欲召孔子也。詳見孔子圖譜。○孔子所謂堅白、猶曾子云江漢以濯之、秋陽以暴之也。濯以江漢則潔、是爲白矣。暴以秋陽則乾、是爲堅矣。白者、質素不汚之意。堅者、篤實不破之意。白而至於堅、則純而不已矣。戰國時公孫龍爲堅白同異之論。以其有形者言、不能強同、以其無形者言、何嘗有異。此雖辯士之空談、然其説實本於孔子云不曰堅乎、磨而不磷、不曰白乎、涅而不緇。蓋已寓此意矣。天下未有磨不磷之堅、未有涅不緇之白、以形之異稟、而一定不可移也。惟無形之堅、磨乃不磷。無形之白、涅乃不緇。以其理之同、而變易無方耳。其爲此言、猶曰親於其身爲不善者、君子不入、吾固有是言矣、然亦何嘗不説磨不磷之爲堅、涅不緇之爲白乎。蓋言自己不著於堅白之形、而不磷不緇也。爲子路沮赴佛肸之召、故以此諭意。至公孫龍、竊其緒論而恣爲大言、則欲合異爲同、以玄虛而齊物矣。若曾子但就孔子堅白之至者言之、而無形之妙自寓其中、此其所以爲實學也歟。然則孔子不磷不緇之言、豈下學之士所可易及哉。○匏瓜、猶俗言死胡蘆頭也。蓋以匏瓜比髑髏耳。

［訓読］

○仏肸（ひっきつ）召す。子往かんと欲す。子路曰く、昔者（むかし）由や諸（これ）を夫子に聞けり。曰く、親ら其の身に於いて不善を

為す者は、君子は入らざるなり、と。仏肸、中牟を以て畔く。子の往くや、之を如何、と。子曰く、然り、是の言有るなり。堅きを曰はずや、磨すれども磷がず。白きを曰はずや、涅すれども緇まず、と。吾豈に匏瓜ならんや。焉んぞ能く繫りて食らはざらん、と。

佛肸は、趙鞅の家臣。鞅の畔くに因りて亦た畔く。故に孔子を召さんと欲するなり。詳しくは孔子図譜に見ゆ。〇孔子の所謂堅、白は、猶ほ曾子の云ふ江漢以て之を濯ひ、秋陽以て之を暴すなり。濯ふに江漢を以てすれば則ち潔く、是れを白しと為す。暴すに秋陽を以てすれば則ち乾き、是れを堅しと為す。白きは、質素にして汚れざるの意。堅きは、篤実にして破れざるの意。白くして堅きに至れば、則ち純にして已まざらん。戦国の時、公孫龍、堅白同異の論を為す。其の形有る者を以て言へば、同じきことを強ふる能はず、其の形無き者を以て言へば、何ぞ嘗て異なること有らん。此れ弁士の空談と雖も、然れども其の説は実に孔子の堅きを曰はずや、磨すれども磷がず、白きを曰はずや、涅すれども緇まず、と云ふに本づく。蓋し已に此の意を寓せり。天下に未だ磨して磷がざるの堅き有らず、未だ涅して緇まざるの白き有らざるは、形の稟くるを異にするを以て、一定して移るべからざるなり。惟だ形無きの堅きは、磨すれども乃ち磷がず。形無きの白きは、涅すれども乃ち緇まず。其の理の同じきを以て、変易するに方無きのみ。其れ此の言たるや、猶ほ親ら其の身に於いて不善を為す者は、君子は入らず、吾固より是の言有り、然れども亦た何ぞ嘗て磨すれども磷がざるの堅きと為り、涅して緇まざるの白きと為るを説かざるや、と曰ふがごとし。蓋し自己は堅白の形を著さずして、磷がず緇まざるを言ふなり。子

路、佛肸の召しに赴くを沮むが為に、故に此の論意を以てす。公孫竜に至りて、其の緒論を窃みて恣（ほしいまま）に大言を為しては、則ち異を合して同と為さんと欲して、以て玄虚にして物を斉しくす。曾子のごときは但だ孔子堅白の至れる者に就きて之を言ひて、形無きの妙自ら其の中に寓す。此れ其の実学を為す所以ならんか。然れば則ち孔子の磷がず緇まずの言は、豈に下学の士の及び易かるべき所ならんや。

○匏瓜は、猶ほ俗に死胡蘆頭を言ふなり。蓋し匏瓜を以て髑髏に比するのみ。

［語釈］

○孔子圖譜　佚書。本篇第一章の［語釈］参照。

○曾子云～秋陽以暴之　『孟子』滕文公上・4章。

○公孫龍爲堅白同異之論　『公孫竜子』堅白論。

【八】

○子曰、由也、女聞六言六蔽矣乎。對曰、未也。居、吾語女。好仁不好學、其蔽也愚。好智不好學、其蔽也蕩。好信不好學、其蔽也賊。好直不好學、其蔽也絞。好勇不好學、其蔽也亂。好剛不好學、其蔽也狂。

孔子告子路以六言六蔽。比之其他告門弟子之説、頗若繁碎。今以其説求之、亦自有條理。蓋仁智者、成己成物之德、合内外之道、而切於身者也。故舉以先焉。其下信直勇剛、則因子路德性之所偏而告之。亦切病之要藥也。好學則理明而可以開蔽矣。狂亦有任真自肆意。

［訓読］

○子曰く、由や、女(なんぢ)六言六蔽を聞くや。対へて曰く、未だし、と。居れ、吾、女に語(つ)げん。仁を好みて学を好まざれば、其の蔽や愚。智を好みて学を好まざれば、其の蔽や蕩。信を好みて学を好まざれば、其の蔽や賊。直を好みて学を好まざれば、其の蔽や絞。勇を好みて学を好まざれば、其の蔽や乱。剛を好みて学を好まざれば、其の蔽や狂。

孔子、子路に告ぐるに六言六蔽を以てす。之を其の他の門弟子に告ぐるの説に比するに、頗る繁砕のごとし。今、其の説を以て之を求むるも、亦た自ら条理有り。蓋し仁、智は、己を成し物を成すの徳、内外を合するの道にして、身に切なる者なり。故に挙げて以て焉(これ)を先とす。其の下の信、直、勇、剛は、則ち子路の徳性の偏る所に因りて之を告ぐ。亦た病に切なるの要薬なり。学を好めば則ち理明らかにして以て蔽を開くべし。狂は亦た真に任じ自ら肆(ほしいまま)にするの意有り。

［校異］

○好智不好學　校本は「智」を「知」に作る。

【九】

○子曰、小子、何莫學夫詩。詩可以興、可以觀、可以群、可以怨。邇之事父、遠之事君、多識於鳥獸草木之名。

多識於鳥獸草木之名、知其名亦何益於學。蓋謂於鳥獸草木之名亦得其性情、吾心因有以多識也。此七言者、皆以詩性情得正、而足以爲感發興起之端、有益於心之實學。與周禮太師所言六義者大不同矣。詳見説理會編卷之十。

［訓読］

○子曰く、小子、何ぞ夫の詩を学ぶこと莫きや。詩は以て興すべく、以て観るべく、以て群すべく、以て怨むべし。之を邇くしては父に事へ、之を遠くしては君に事へ、多く鳥獸草木の名を識る、と。

多く鳥獸草木の名を識る、其の名を知るは亦た何ぞ学に益あらん。蓋し鳥獸草木の名に於いても亦た其の性情を得れば、吾が心因りて以て多く識ること有るを謂ふなり。此の七言は、皆詩を以て性情、正しきを得て、以て感発興起するの端を為すに足り、心の実学に益有り。周礼太師の言ふ所の六義なる者と大いに同じからず。詳しくは説理会編巻の十に見ゆ。

［語釈］

○周禮太師所言六義　『周礼』太師に「詩に六義有り。一に風と曰ひ、二に賦と曰ひ、三に比と曰ひ、四に興と曰ひ、五に頌と曰ひ、六に雅と曰ふ」との引用が『説理会編』巻十・50条に見える。

○詳見説理會編卷之十　『説理会編』巻十・50条において、季本は『周礼』に所謂「六義」を「窃かに謂へらく此れ只だ後世に所謂体格にして、作詩の義は此に在らず」と評した上で、『論語』の本章こそが「性情の正しきに出でて、以て人をして感動興起せしむるに足る」とし、「此れ則

ち詩の義なり」と結んでいる。

【十】

○子謂伯魚曰、女爲周南召南矣乎。人而不爲周南召南、其猶正牆面而立也與。

周南召南、德之有實用處、於學爲切。

［訓読］

○子、伯魚に謂ひて曰く、女（なんぢ）、周南、召南を為（まな）びたるか。人にして周南、召南を為ばざれば、其れ猶ほ正しく牆に面して立つがごときか、と。

周南、召南は、德の実に用ふる処有り、学に於いて切たり。

［語釈］

○周南召南　『詩経』国風冒頭の二篇。

［校異］

○牆面　底本は「牆」を「南」に作る。校本に拠って改めた。

【十一】

○子曰、禮云禮云。玉帛云乎哉。樂云樂云。鍾鼓云乎哉。

禮之本只是敬、樂之本只是和。玉帛鍾鼓、禮樂之迹、乃其末也。言禮樂當求之於本也。○程子謂盜賊爲

有禮樂。是以迹言也。敬與和安在。而以此言禮樂乎。

［訓読］

○子曰く、礼と云ひ礼と云ふ。玉帛を云はんや。楽と云ひ楽と云ふ。鍾鼓を云はんや、と。

礼の本は只だ是れ敬、楽の本は只だ是れ和。玉帛、鍾鼓は、礼楽の跡、乃ち其の末なり。礼楽は当に之を本に求むべきを言ふなり。○程子、盗賊を謂ひて礼楽有りと為す。是れ迹を以て言ふなり。敬と和と安くにか在らん。而るに此れを以て礼楽と言はんや。

［語釈］

○程子謂　『論語集注』陽貨・11章に引く程子語に「盗賊のごときは、至りて不道を為せども、然れども亦た礼楽有り。蓋し必ず総属有りて、必ず相ひ聴順して、乃ち盗を為す。……礼楽は処として之れ無きこと無し」とある。

［校異］

○禮樂之迹　校本は「迹」を「跡」に作る。

○是以迹言也　校本は「迹」を「跡」に作る。

【十二】

○子曰、色厲而内荏、譬諸小人、其猶穿窬之盗也與。

内荏、非止謂柔弱。以柔弱必容私、故比之穿窬之盜。蓋小人中、穿窬之盜尤爲鄙細也。

［訓読］

○子曰く、色厲にして内荏なるは、諸を小人に譬ふれば、其れ猶ほ穿愉の盜のごときか、と。

内荏は、止だに柔弱を謂ふのみに非ず。柔弱の必ず私を容るるを以て、故に之を穿窬の盜に比す。蓋し小人の中、穿窬の盜を尤も鄙細と為せばなり。

［校異］

○譬諸小人　底本は「譬」を「辟」に作る。校本に拠って改めた。

【十三】

○子曰、鄉原、德之賊也。

鄉愿爲人亦難看。惟孔子能知之。非孟子發明詳盡、則亦無以知害德之實也。

［訓読］

○子曰く、鄉原は、德の賊なり、と。

鄉愿は人と為り亦た看難し。惟だ孔子のみ能く之を知る。孟子の発明すること詳尽なるに非ざれば、則ち亦た以て德を害ふの実を知ること無きなり。

［語釈］

○孟子發明詳盡　『孟子』尽心下・37章。

【十四】

○子曰、道聽而塗説、德之棄也。

道、陌上之路也。塗、城中之塗也。聞善言而徒資口説、則德不畜、故謂之棄。

［訓読］

○子曰く、道に聴きて塗（みち）に説くは、德を之れ棄つるなり、と。

道は、陌上の路なり。塗は、城中の塗なり。善言を聞くも徒だ口に説くを資くるのみなれば、則ち德畜へられず、故に之を棄つと謂ふ。

【十五】

○子曰、鄙夫可與事君也與哉。其未得之也、患得之。既得之、患失之。苟患失之、無所不至矣。

患得患失、亦是一念。富貴之心、無所不至、則不恤人言、不顧天理、而成大惡矣。此事君者所以貴於忠也。忠則敬其事而後其食。豈肯自利哉。

［訓読］

○子曰く、鄙夫は与に君に事ふべけんや。其の未だ之を得ざれば、之を得んことを患（うれ）ふ。既に之を得れば、

之を失はんことを患ふ。苟くも之を失はんことを患ふれば、至らざる所無し、と。

得んことを患ひ失はんことを患ふるも、亦た是れ一念なり。富貴の心、至らざる所無ければ、則ち人の言を恤(おそ)れず、天理を顧みずして、大悪を成さん。此れ君に事ふる者の忠を貴ぶ所以なり。忠なれば則ち其の事に敬して其の食を後にす。豈に肯て自ら利せんや。

【十六】

○子曰、古者民有三疾、今也或是之亡也。古之狂也肆、今之狂也蕩。古之矜也廉、今之矜也忿戾。古之愚也直、今之愚也詐而已矣。

矜狂愚正是三疾、廉肆直則疾之所以爲疾。以起忿戾蕩詐、而見其疾之亡也。孔子之時、曾點之高明、狂也。原憲之狷介、矜也。高柴之執守、愚也。故不謂之亡、而曰或是之亡也。○聖人以矜狂愚爲三疾、蓋有所指。矜謂持守莊嚴、即狷者也。以其有稜角處、故謂之廉。然但少樂易耳。若忿戾則克伐盡行、而人無所容矣。狂謂志意高遠、即狂者也。以其有忽略時、故謂之肆。然但少精密耳。若蕩則禮法盡廢、而已無所守矣。愚謂執滯不通、即信果之小人也。以其任性所爲、戇無顧忌、故謂之直。然恆心猶未失也。若無而爲有、虛而爲盈、約而爲泰、則詐矣。由是觀之、不惟狂狷不易得、而有恆者、雖困於愚亦所未有。故曰、得見有恆者、斯可矣。蓋三疾、氣質之偏也。使知好學以反之、則亦可以成德。如柳下惠之不恭似肆、伯夷之隘似廉、比干之強諫似直。惟其能以學自成、則皆入聖。不然、則亦安能免於三疾哉。

［訓読］

○子曰く、古者（いにしへ）は民に三疾有り、今や或いは是れを之れ亡ぼすなり。古の狂や肆、今の狂や蕩。古の矜や廉、今の矜や忿戾。古の愚や直、今の愚や詐のみ、と。

矜、狂、愚は正に是れ三疾にして、廉、肆、直は則ち疾の疾たる所以なり。忿戾、蕩、詐を起こすを以てして、其の疾の亡ぼすを見すなり。孔子の時、曾点の高明は、狂なり。原憲の狷介は、矜なり。高柴の執守は、愚なり。故に之を亡ぼすと謂はずして、或いは是れを之れ亡ぼすと曰ふなり。○聖人、矜、狂、愚を以て三疾と為すは、蓋し指す所有り。矜は持守すること荘厳なるを謂ふ、即ち狷者なり。其の稜角する処有るを以て、故に之を廉と謂ふ。然れども但だ少しく楽易なるのみ。若（も）し忿戾なれば則ち克伐尽く行ひて、人に容るる所無からん。狂は志意の高遠なるを謂ふ、即ち狂者なり。其の忽略なる時有るを以て、故に之を肆と謂ふ。然れども但だ少しく精密なるのみ。若し蕩なれば則ち礼法尽く廃して、己に守る所無からん。愚は執滞通ぜざるを謂ふ、即ち信果の小人なり。其の性の為す所に任せて、戇にして顧忌すること無きを以て、故に之を直と謂ふ。然れども恒心は猶ほ未だ失はざるなり。若し無くして有りと為し、虚しくして盈てりと為し、約にして泰（ゆた）かと為せば、則ち詐ならん。是れに由りて之を観れば、惟だに狂、狷得易からざるのみならずして、恒有る者も、愚に困しむと雖も亦た未だ有らざる所なり。故に曰く、恒有る者を見るを得れば、斯ち可なり、と。蓋し三疾は、気質の偏りなり。学を好みて以て之に反るを知らしめば、則ち亦た以て徳を成すべし。柳下恵の不恭は肆に似、伯夷の隘は廉に似、

比干の強諫は直に似たるがごとし。惟だ其れ能く学を以て自ら成せば、則ち皆聖に入る。然らざれば、則ち亦た安んぞ能く三疾を免れんや。

［語釈］

○無而爲有～約而爲泰　『論語』述而・25章。

○得見有恆者斯可矣　『論語』述而・25章。

［校異］

○戇無顧忌　校本は「戇」を「憨」に作る。

【十七】

○子曰、巧言令色、鮮矣仁。

見學而篇。

［訓読］

○子曰く、巧言令色、鮮なし仁、と。

学而篇に見ゆ。

［語釈］

○見學而篇　『論語』学而・3章にも同文がある。

【十八】

○子曰、惡紫之奪朱也。惡鄭聲之亂雅樂也。惡利口之覆邦家者。

紫比朱爲深。然以之閒朱、則疑於朱矣。鄭聲比雅樂爲淫。然以之閒雅樂、則疑於雅矣。朱以章服、樂以察音。即書采施五色、汝明。出納五言、汝聽之意、皆所以正群臣之德。朱爲紫奪、雅爲鄭奪。紫疑於朱、鄭疑於雅。似是而非、此孔子所以惡也。以興利口之亂信、亦似是而非者也。於此不察、則覆邦家。安得而不惡之。耳目爲聲色所眩、猶當深惡。況人心爲利口所眩乎。欲人正是非之心、辨於疑似之際也。

［訓読］

○子曰く、紫の朱を奪ふを悪む。鄭声の雅楽を乱すを悪む。利口の邦家を覆す者を悪む、と。

紫は朱に比せば深しと為す。然れども之を以て朱に間ふれば、則ち朱に疑はれん。鄭声は雅楽に比せば淫りと為す。然れども之を以て雅楽に間ふれば、則ち雅に疑はれん。朱は以て服を章らかにし、楽は以て音を察す。即ち書の五色を采施す、汝明らかにせよ。五言を出納す、汝聴けの意、皆群臣の徳を正す所以なり。朱、紫に奪はれ、雅、鄭に奪はる。紫、朱に疑はれ、鄭、雅に疑はる。是に似て非なる、此れ孔子の悪む所以なり。以て利口の信を乱すを興すも、亦た是に似て非なる者なり。此に於いて察せざれば、則ち邦家を覆さん。安んぞ得て之を悪まざらんや。耳目の声色の眩むる所と為るすら、猶ほ当に深く悪むべし。況んや人心の利口の眩むる所と為るをや。人の是非の心を正し、疑似の際を弁ぜんことを欲するなり。

［語釈］

○書采施五色～汝聽　『尚書』益稷。

○似是而非、此孔子所以惡也　『孟子』尽心下・37章に「孔子曰く、似て非なる者を悪む」とある。

［校異］

○此孔子所以惡也　校本は「此」を欠く。

【十九】

○子曰、予欲無言。子貢曰、子如不言、則小子何述焉。子曰、天何言哉。四時行焉、百物生焉。天何言哉。

此章之旨、集註得之。所引程子之言、發明尤盡。

［訓読］

○子曰く、予言ふこと無からんと欲す、と。子貢曰く、子如し言はざれば、則ち小子何をか述べん、と。子曰く、天何をか言はんや。四時行(めぐ)り、百物生ず。天何をか言はんや、と。

此章の旨、集註之を得たり。引く所の程子の言、発明すること尤も尽くせり。

［語釈］

○所引程子之言　『論語集注』陽貨・19章に引く程子語に「孔子の道は、譬へば日星の明らかなるがごとくなるも、猶ほ門人未だ尽く暁ること能はざるを患ふ。故に曰く、予言ふこと無からんと

欲す、と。顔子のごときは則ち便ち黙識す。其の他は則ち未だ疑問を免れず。故に曰く、小子何をか述べん、と。又た曰く、天何をか言はんや。四時行り、百物生ず、と。則ち至りて明白と謂ふべし」とある。

【二十】

○孺悲欲見孔子。孔子辭以疾。將命者出戸。取瑟而歌、使之聞之。

孔子取瑟而歌、以警孺悲。雖其不終絶人之仁、然亦見孺悲猶有可教之地也。

［訓読］

○孺悲、孔子を見んと欲す。孔子辞するに疾を以てす。命を将(おこな)ふ者、戸を出づ。瑟を取りて歌ひ、之をして之を聞かしむ。

孔子、瑟を取りて歌ひて、以て孺悲を警(いましめ)む。其の人を絶つの仁に終はらずと雖も、然れども亦た孺悲猶ほ教ふべきの地有るを見すなり。

【二十一】

○宰我問、三年之喪、期已久矣。君子三年不爲禮、禮必壞。三年不爲樂、樂必崩。舊穀既沒、新穀既升、鑽燧改火。期可已矣。子曰、食夫稻、衣夫錦、於女安乎。曰、安。女安、則爲之。夫君子之居喪、食旨不

甘、聞樂不樂、居處不安、故不爲也。今女安、則爲之。

爲之與故不爲也、指食稲衣錦言。安字、起不忍之端。

宰我出。子曰、予之不仁也。子生三年、然後免於父母之懷。夫三年之喪、天下之通喪也。予也有三年之愛於其父母乎。

此以父母之恩啓宰我不安之心。

［訓読］

○宰我問ふ、三年の喪は、期も已に久し。君子三年礼を為さざれば、礼必ず壊(やぶ)れん。三年楽を為さざれば、楽必ず崩れん。旧穀既に没(つ)きて、新穀既に升(みの)り、燧(すい)を鑽(き)りて火を改む。期にして已むべし、と。子曰く、夫の稲を食らひ、夫の錦を衣ること、女(なんぢ)に於いて安きか、と。曰く、安し、と。女安ければ、則ち之を為せ。夫れ君子の喪に居るや、旨きを食らへども甘からず、楽を聞けども楽しまず、居処安からず、故に為さざるなり。今女安ければ、則ち之を為せ、と。

之を為せと故に為さざるなりとは、稲を食らひ錦を衣るを指して言ふ。安の字は、忍びざるの端を起こす。

宰我出づ。子曰く、予の不仁なるや。子生まれて三年、然る後に父母の懷を免る。夫れ三年の喪は、天下の通喪なり。予や其の父母に三年の愛有らんか、と。

此れ父母の恩を以て宰我の安からざるの心を啓けり。

【二十二】

○子曰、飽食終日、無所用心、難矣哉。不有博弈者乎。爲之、猶賢乎已。

博弈猶賢乎已、如朱子所謂纔讀書、則心便主於讀書、纔寫字、則心便主於寫字也。如此則心有所著、亦非心體之正。蓋人無所用心、未免入於邪僻、則不若有事庶幾可以維持此心也。久之有所開明、則本體見矣。難矣哉者、張横渠所謂放越而莫知其極、惡之所由生也。

［訓読］

○子曰く、飽食終日、心を用ふる所無ければ、難きかな。博弈なる者有らずや。之を為すは、猶ほ已むに賢れり、と。

博弈猶ほ已むに賢れりは、朱子の所謂纔かに書を読めば、則ち心は便ち書を読むに主たらん、纔かに字を写せば、則ち心は便ち字を写すに主たらんのごとし。此くのごときは則ち心に著する所有りて、亦た心体の正に非ず。蓋し人、心を用ふる所無くして、未だ邪僻に入るを免れざれば、則ち事とすること有るの以て此の心を維持すべきに庶幾(ちか)きに若かざるなり。之を久しくして開明する所有れば、則ち本体見(あらは)れん。難きかなは、張横渠の所謂放越して其の極を知ること莫きは、悪の由りて生ずる所なり。

［語釈］

○朱子所謂　『論語集注大全』陽貨・22章。

○張横渠所謂　『論語集注大全』陽貨・22章。

【二十三】

○子路曰、君子尚勇乎。子曰、君子義以爲上。君子有勇而無義、爲亂。小人有勇而無義、爲盗。

慶源輔氏曰、尚義而勇、義理之勇也。勇而無義、血氣之勇也。爲血氣所使、而不以義理制之。故其爲害、在上則逆理而爲亂、在下則肆欲而爲盗。子路之言有自負其勇之意。若後來進德高、必不復以此爲問矣。

［訓読］

○子路曰く、君子勇を尚ぶか、と。子曰く、君子義以て上と為す。君子勇有りて義無ければ、乱を為す。小人勇有りて義無ければ、盗を為す、と。

慶源輔氏曰く、義を尚びて勇なるは、義理の勇なり。勇にして義無ければ、血気の勇なり。血気の使ふ所と為りて、義理を以て之を制せず。故に其の害を為すこと、上に在れば則ち理に逆らひて乱を為し、下に在れば則ち欲を肆にして盗を為す。子路の言に其の勇を自負するの意有り。若し後来徳を進むること高ければ、必ず復た此れを以て問ひを為さざらん、と。

［語釈］

○慶源輔氏曰　『論語集注大全』陽貨・23章。

【二十四】

○子貢曰、君子亦有惡乎。子曰、有惡。惡稱人之惡者。惡居下流而訕上者。惡勇而無禮者。惡果敢而窒者。

勇、謂奮發。果敢、謂決斷。皆氣質之所爲。勇而有禮、果敢而不窒、則出於學問矣。天下可惡之事、尤有重者、而獨舉此四端。蓋爲當時學者之通病而發也。

曰、賜也亦有惡乎。惡徼以爲智者。惡不孫以爲勇者。惡訐以爲直者。

賜也亦有惡乎、蓋孔子之問。下當有曰字。則子貢之答辭也。知勇直、皆達德之事。徼不孫訐、動於氣者也。蓋惡近似者之害德、而欲以自警也。

［訓読］

○子貢曰く、君子も亦た悪むこと有りや、と。子曰く、悪むこと有り。人の悪を称する者を悪む。下流に居りて上を訕る者を悪む。勇にして礼無き者を悪む。果敢にして窒がる者を悪む、と。

勇は、奮発を謂ふ。果敢は、決断を謂ふ。皆気質の為す所なり。勇にして礼有り、果敢にして窒がらざれば、則ち学問に出でん。天下の悪むべきの事、尤も重き者有るも、独り此の四端を挙ぐ。蓋し当時

の学者の通病の為にして発するなり。

曰く、賜も亦た悪むこと有りや、と。徼(きょう)にして以て智と為す者を悪む。不孫にして以て勇と為す者を悪む。訐にして以て直と為す者を悪む。

賜も亦た悪むこと有りやは、蓋し孔子の問ひなり。下に当に曰の字有るべし。則ち子貢の答辞なり。知、勇、直は、皆達徳の事。徼、不孫、訐は、気に動ぜらるる者なり。蓋し近似する者の徳を害ふを悪みて、以て自ら警めんと欲するなり。

［校異］

○惡徼以爲智者　校本は「智」を「知」に作る。

【二十五】

○子曰、唯女子與小人爲難養也。近之則不孫、遠之則怨。

易之遯以不惡而嚴畜臣妾、即此義也。

［訓読］

○子曰く、唯だ女子と小人とを養ひ難しと為す。之を近づくれば則ち不孫、之を遠ざくれば則ち怨む、と。

易の遯、悪まずして厳にするを以て臣妾を畜ふは、即ち此の義なり。

［語釈］

○易之遯以不惡而嚴畜臣妾　『周易』遯卦に「君子は以て小人を遠ざけ、悪まずして厳にす」とあ

り、爻辞に「臣妾を畜ふ」とあるのを踏まえる。

【二十六】

○子曰、年四十而見惡焉。其終也已。

朱子曰、見惡、謂有可惡之實、而見惡於能惡人者。非不善者惡之之謂也。此言雖亦可通、但不若以惡讀如字乃爲易曉耳。見惡、謂惡顯於外也。

［訓読］

○子曰く、年四十にして悪を見(あら)はす。其れ終はらんのみ、と。

朱子曰く、見悪は、悪むべきの実有りて、能く人を悪む者に悪まるるを謂ふ。不善者の之を悪むの謂ひに非ざるなり、と。此の言亦た通ずべしと雖も、但だ悪を以て読むこと字のごとくして乃ち暁り易しと為すに若かざるのみ。見悪は、悪の外に顕はるるを謂ふなり。

［語釈］

○朱子曰　『論語集注大全』陽貨・26章に「見悪は、亦た悪むべきの実有りて、罪を能く人を悪む者に得るを謂ふ。不善者、之を悪むの謂ひに非ざるなり」とある。これに拠れば、本文の訓読は「悪まる」となる。

○能惡人者　『論語』里仁・3章に「唯だ仁者のみ、能く人を好み、能く人を悪む」とある。

○讀如字　その字本来の音で読むこと。「読如（読若）」は漢儒注釈法の一つ。

論語私存卷十七　終

『論語私存』訳注（十四）　（水野・阿部・大場・松野）

論語私存卷十八

會稽季本箋釋

微子第十八

【一】

微子去之、箕子爲之奴、比干諫而死。孔子曰、殷有三仁焉。

孟子曰、以紂爲兄之子、而有微子啓王子比干。則二子者、皆紂之諸父也。史記誤以微子爲紂庶兄、而比干箕子皆以爲紂親戚。然觀商書微子篇、箕子稱比干爲王子。似乎異姓相稱之辭。則謂箕子爲同姓、尚可疑也。又謂微子去、比干強諫、紂怒、剖比干、觀其心、箕子懼、乃佯狂爲奴、敘箕子之奴於比干之後。又謂箕子懼而佯狂、亦非爲紂所囚之意也。皆與論語不合。且佯狂之説、於經無據。易言箕子之明夷、乃其心中有甚難處不可以語人者、而不失其心、故以内難而正其志、釋艱貞之義。其實自晦其明、與文王外柔順而内文明意同。見其能明哲保身也、豈必謂佯狂哉。

［訓読］

微子、之を去り、箕子、之が奴と為り、比干、諫めて死す。孔子曰く、殷に三仁有り、と。

孟子曰く、紂を以て兄の子と為して、微子啓、王子比干有り、と。則ち二子とは、皆な紂の諸父なり。史記誤りて微子を以て紂の庶兄と為す、而して比干、箕子皆な以て紂の親戚と為す。然れども商書微子

篇を観るに、箕子は比干を称して王子と為す。異姓相ひ称するの辞に似たり。則ち箕子は同姓たりと謂ふは、尚ほ疑ふべきなり。又た微子去り、比干強諫す、紂怒り、比干を剖き、其の心を観る、箕子懼れ、乃ち佯狂して奴と為ると謂へば、箕子の奴を比干の後に敘す。又た箕子懼れて佯狂すと謂ふは、亦た紂の囚ふる所と為るの意に非ざるなり。皆な論語と合せず。且つ佯狂の説、経に於いて拠る無し。易に箕子の明夷と言ふは、乃ち其の心中に甚だ難き処、以て人に語るべからざる者有り、而れども其の心を失はず、故に内に難ありて其の志を正すを以て、艱貞の義を釈す。其の実、自ら其の明を晦くするは、文王は外、柔順にして内、文明なると意同じ。其の能く明哲保身するを見すなり、豈に必ずしも佯狂と謂はんや。

［語釈］

○孟子曰、以紂爲兄之子、而有微子啓、王子比干　『孟子』告子章句上・6章。

○史記誤以微子爲紂庶兄、而比干箕子皆以爲紂親戚　『史記』巻十三・三代世表に、「宋の微子啓は、紂の庶兄なり」とある。『史記』巻三十八・宋微子世家に、「箕子なる者は、紂の親戚なり。……王子比干なる者も、亦た紂の親戚なり」とある。

○觀商書微子篇、箕子稱比干爲王子　『尚書』微子篇に「父師若く曰く、王子よ、……王子に出で迪れんことを詔ぐ」とある。「父師」は箕子のこと。箕子が比干のことを「王子」と呼んだとする。なお、鄭玄や蔡沈『書集伝』など多くの注釈では「王子」とは微子のこととする。

○微子去、比干強諫。紂怒、剖比干、觀其心、箕子懼、乃佯狂爲奴　『史記』巻三・殷本紀に、「比干曰く、人臣たる者、死を以て争はざるを得ず、と。迺ち強いて紂を諫む。紂怒りて曰く、吾聞く聖人の心に七竅有りと。比干を剖き、其の心を観る。箕子懼れ、乃ち詳狂として奴と為るも、紂又た之を囚ふ」とある。

○易言箕子之明夷　『周易』明夷に、「六五、箕子の明夷（やぶ）る。貞（ただ）しきに利あり」とある。

○内難而正其志　『周易』明夷の卦辞に「明夷は、艱貞に利あり」とあり、彖伝に「艱貞に利ありとは、其の明を晦（くら）くするなり。内に難ありて能く其の志を正す。箕子、之を以てす」とある。「明夷」は、自分の明智を隠すのがよいとする卦。暴君の身内として国内にいるという難儀において、箕子がよくその明智を隠し、正しい志を守ったことを言う。

○自晦其明　前注「内難而正其志」参照。

○文王外柔順而内文明　『周易』明夷に、「彖に曰く、明、地中に入るは明夷なり。内、文明にして外、従順、以て大難を蒙る。文王、之を以てす」とある。内心は叡智に富み、他者に従順であった文王が、紂王によって囚えられるという難に遭ったことを言う。

［校異］

○亦非爲紂所囚之意也。皆與論語不合。且佯狂　校本は此の十八字を欠く。

【二】

○柳下惠爲士師、三黜。人曰、子未可以去乎。曰、直道而事人、焉往而不三黜。枉道而事人、何必去父母之邦。

觀臧文仲知柳下惠之賢、而不與立、則柳下惠爲士師而三黜、當在魯僖文之際。云枉道而事人、何必去父母之邦者、非謂道可枉也。蓋必不枉道事人、以免三黜之意。

［訓読］

○柳下恵、士師と為りて、三たび黜けらる。人曰く、子未だ以て去るべからざるか、と。曰く、道を直くして人に事ふれば、焉くに往くとして三たび黜けられざらん。道を枉げて人に事ふれば、何ぞ必ずしも父母の邦を去らん、と。

臧文仲、柳下恵の賢を知りて、而るに与に立たざるを観れば、則ち柳下恵の士師と為りて三たび黜けらるるは、当に魯の僖、文の際に在るべし。道を枉げて人に事ふれば、何ぞ必ずしも父母の邦を去らんと云ふ者は、道の枉ぐべきを謂ふに非ざるなり。蓋し必ず道を枉げて人に事へて、以て三たび黜けらるるを免るれざるの意なり。

［語釈］

○臧文仲知柳下惠之賢、而不與立　『論語』衛霊公篇・13章に、「子曰く、臧文仲は其れ位を窃む者か、柳下恵の賢を知りて、而るに与に立たざるなり」とある。

【三】

○齊景公待孔子。曰、若季氏、則吾不能、以季孟之間待之。曰、吾老矣、不能用也。孔子行。

齊景公本知孔子、但無志於治、故曰吾老矣、不能用也。亦非景公欲封尼谿、而晏嬰沮之。詳見孔子圖譜。

［訓読］

○斉の景公、孔子を待す。曰く、季氏のごとくするは、則ち吾、能くせず、季孟の間を以て之を待せん、と。曰く、吾老いたり、用ふること能はざるなり、と。孔子行る。

斉の景公、本より孔子を知る、但だ治に志無し、故に吾老いたり、用ふること能はざるなりと曰ふ。亦た景公の尼谿に封ぜんと欲して、晏嬰の之を沮むに非ず。詳しくは孔子図譜に見ゆ。

［語釈］

○景公欲封尼谿、而晏嬰沮之　『史記』巻四七・孔子世家に「景公説び、将に尼渓の田を以て孔子を封ぜんと欲す。晏嬰進みて曰く、夫れ儒者は滑稽にして軌法とすべからず。……と。後、景公、敬みて孔子を見るも、其の礼を問はず。異日、景公、孔子を止めて曰く、子を奉ずるに季氏を以てすることは、吾、能くせず。季孟の間を以て之を待せん、と。斉の大夫、孔子を害せんと欲す。孔子、之を聞く。景公曰く、吾老いたり、用ふること能はず、と。孔子遂に行り、魯に反る」とある。

○孔子圖譜　佚書。陽貨篇第一章の［語釈］参照。

【四】

○齊人歸女樂、季桓子受之。三日不朝。孔子行。

此孔子爲魯司寇、膰肉不至、不税冕而行之時也。觀季桓子受之、三日不朝而去、則孔子去魯、當爲十二年事矣。詳見孔子圖譜。

［訓読］

○斉人、女楽を帰る。季桓子、之を受く。三日朝せず。孔子行る。

此れ孔子、魯の司寇と為り、膰肉、至らず、冕を税がずして行るの時なり。季桓子、之を受け、三日朝せずして去るを観れば、則ち孔子の魯を去るは、当に十二年の事たるべし。詳しくは孔子図譜に見ゆ。

［語釈］

○此孔子為魯司寇、膰肉不至、不税冕而行之時也　『孟子』告子章句下・7章に「孔子、魯の司寇と為りて用ひられず。従ひて祭りしも、膰肉至らず。冕を脱がずして行る」とある。

○十二年事　魯の定公十二年（前四九八）。孔子が魯を去ったのは、定公十三年（前四九七）とされることが多い。

○孔子圖譜　佚書。陽貨篇第一章の［語釈］参照。

【五】

○楚狂接輿歌而過孔子。曰、鳳兮鳳兮、何德之衰。往者不可諫、來者猶可追。已而已而。今之從政者殆而。孔子下、欲與之言。趨而辟之。不得與之言。

南軒張氏曰、接輿之意、蓋欲夫子隱居以避世耳。觀其知鳳德之衰、且辭氣舒暢不迫、其爲人天資亦高矣。故夫子意其可以告語、而欲與之言。其趨而避、蓋匿其聲迹而已。

［訓読］

○楚の狂接輿、歌ひて孔子を過ぐ。曰く、鳳や、鳳や、何ぞ徳の衰へたる。往く者は諫むべからず、来る者は猶ほ追ふべし。已(や)みなん、已みなん。今の政に従ふ者は殆ふし、と。孔子下り、之と言はんと欲す。趨りて之を辟く。之と言ふことを得ず。

南軒張氏曰く、接輿の意、蓋し夫子、隠居して以て世を避くるを欲するのみ。其の鳳徳の衰へたるを知り、且つ辞気舒暢して迫らざるを観るに、其の人と為り、天資亦た高し。故に夫子、其の以て告げ語るべしと意(おも)ひて、之と言はんと欲す。其の趨りて避くるは、蓋し其の声迹を匿すのみ、と。

［語釈］

○南軒張氏曰～蓋匿其聲跡而已　張栻『論語解』微子篇・5章。

【六】

○長沮桀溺耦而耕。孔子過之、使子路問津焉。長沮曰、夫執輿者爲誰。子路曰、爲孔丘。曰、是魯孔丘與。曰、是也。曰、是知津矣。問於桀溺。桀溺曰、子爲誰。曰、爲仲由。曰、是魯孔丘之徒與。對曰、然。曰、滔滔者天下皆是也。而誰以易之。且而與其從辟人之士也、豈若從辟世之士哉。耰而不輟。子路行以告。夫子憮然曰、鳥獸不可與同群、吾非斯人之徒與而誰與。天下有道、丘不與易也。

耦、並耕也。耜、廣五寸、二耜爲耦。一畝三畎、每畎廣尺深尺、兩人並耕一畎、而以土分左右起壟也。耰、覆種、則非水田也。○新安陳氏曰、沮溺以賢人自守之心、而量聖人濟世之心。宜其不足以知聖人也。

［訓読］

○長沮、桀溺耦して耕す。孔子、之を過ぎ、子路をして津を問はしむ。長沮曰く、夫の輿を執る者誰と為す、と。子路曰く、孔丘と為す、と。曰く、是れ魯の孔丘か、と。曰く、是なり、と。曰く、是れ津を知らん、と。桀溺に問ふ。桀溺曰く、子は誰と為す、と。曰く、仲由と為す、と。曰く、是れ魯の孔丘の徒か、と。対へて曰く、然り、と。曰く、滔滔たる者は、天下皆な是れなり。而して誰と以にか之を易へん。且つ而其の人を辟くるの士に従ふ与りは、豈に世を辟くるの士に従ふに若かんや、と。耰して輟めず。子路行きて以て告ぐ。夫子憮然として曰く、鳥獸は与に群を同じくすべからず。吾、斯の人の徒と与にするに非ずして誰と与にせん。天下、道有れば、丘、与に易へざるなり、と。

耦は、並びて耕すなり。耜は、広さ五寸、二耜を耦と為す。一畝に三畎あり、畎毎に広さ尺、深さ尺、

両人並びに一畎を耕して、土を以て左右に分ちて壟を起すなり。耰は、種を覆ふ、則ち水田に非ざるなり。○新安陳氏曰く、沮、溺は賢人の自ら守るの心を以て、而して聖人の世を済はんとするの心を量る。宜なり、其の以て聖人を知るに足らざるや、と。

［語釈］

○新安陳氏曰～宜其不足以知聖人也　『論語集注大全』微子篇・6章。

【七】

○子路從而後。遇丈人以杖荷蓧。子路問曰、子見夫子乎。丈人曰、四體不勤、五穀不分、孰爲夫子。植其杖而芸。子路拱而立。止子路宿。殺鷄爲黍而食之、見其二子焉。明日子路行以告。子曰、隱者也。使子路反見之。至則行矣。子路曰、不仕無義。長幼之節、不可廢也。君臣之義、如之何其廢之。欲潔其身、而亂大倫。君子之仕也、行其義也。道之不行、已知之矣。

植其杖而芸、謂立而以足芸也。蓧、竹器、蓋芸時所用。若以手芸則用蓧。義可仕而不仕、謂之不仕無義。君子之仕、行其義也、正是君臣之義不可廢處。義字、即應不仕無義。○楚狂、沮溺、丈人、皆楚之隱士、孔子在葉時事。詳見孔子圖譜。語録云、問、楚狂接輿等、伊川謂荷蓧稍高。朱子曰、以其尚可告語。若接輿、則全不可曉。問、當亂世、必如孔子之才、可以救世、而後可以出。其他亦何必出。曰、亦不必如此執定。君子之仕、行其義也。亦不可一向滅迹山林。然仕而道不行、則當去耳。

［訓読］

○子路、従ひて後る。丈人の杖を以て蓧を荷ふに遇ふ。子路問ふて曰く、子、夫子を見るか、と。丈人曰く、四体、勤めず、五穀、分たず、孰をか夫子と為す、と。其の杖を植てて芸る。子路、拱して立つ。子路を止めて宿せしむ。鶏を殺し黍を為りて之に食せしめ、其の二子に見えしむ。明日、子路行きて以て告ぐ。子曰く、隠者なり、と。子路をして反りて之を見せしむ。至れば則ち行る。子路曰く、仕へざれば義無し。長幼の節、廃すべからざるなり。君臣の義、之を如何ぞ其れ之を廃せん。其の身を潔くせんと欲して、大倫を乱す。君子の仕ふるや、其の義を行ふなり。道の行はれざるは、已に之を知る、と。

其の杖を植てて芸るとは、立ちて足を以て芸るを謂ふなり。蓧は、竹器、蓋し芸る時に用ふる所ならん。若し手を以て芸るときは則ち蓧を用ふるなり。義として仕ふべくして仕へざるは、之を仕へざれば義無しと謂ふ。君子の仕ふるは、其の義を行ふなり、正に是れ君臣の義、廃すべからざる処なり。義の字は、即ち仕へざれば義無しに応ず。○楚狂、沮溺、丈人は、皆な楚の隠士、孔子、葉に在りし時の事なり。詳しくは孔子図譜に見ゆ。語録に云ふ、問ふ、楚の狂接輿等、伊川、蓧を荷ふこと稍や高しと謂ふ、と。朱子曰く、其の尚ほ告げ語るべきを以てすればなり。接輿のごときは、則ち全く暁るべからず、と。問ふ、乱世に当りて、必ず孔子のごときの才にして、以て世を救ふべくして、而る後に以て出づべし。其の他、亦た何ぞ必ずしも出でん、と。曰く、亦た必ずしも此くのごとく執定せざれ。君子の仕は、其の義を行ふなり。亦た一向に迹を山林に滅すべからず。然れども仕へて道、行はれざれば、則ち当に

去るべきのみ、と。

［語釈］

○孔子圖譜　佚書。陽貨篇第一章の［語釈］参照。

○語録云～則當去耳　『朱子語類』巻四十八・論語三十・微子篇。

【八】

○逸民、伯夷、叔齊、虞仲、夷逸、朱張、柳下惠、少連。子曰、不降其志、不辱其身、伯夷叔齊與。謂柳下惠、少連、降志辱身矣、言中倫、行中慮、其斯而已矣。謂虞仲、夷逸、隱居放言。身中清、廢中權。降志、即辱身矣。新安陳氏以伯夷之事分而爲二、非也。柳下惠、少連、降志辱身、而言行能中。即其由由然不自失處。其斯而已、斯指言行、言和之所以可取者、惟在言行之中也。雙峰饒氏之説得之。虞仲、夷逸隱居獨善、即伯夷之清、放言而自示其不可用。則言不合於先王之法者多矣。然自廢以成其清、清而得中者也。故曰中清、而又曰中權。六人之外、尚有朱張而不及其事者、闕文耳。

我則異於是、無可無不可。

諸逸民之事、皆自以爲可者也。有可則有不可、雖皆造乎聖人、而未至於不可知之神也。若孔子則無可無不可、而神化不測矣。尹氏之説得之。○南軒張氏謂、夷齊爲有不可、下惠少連爲有可。致堂胡氏謂、聖人無可而無不可、爲非固、無不可而無可、爲非流。則皆以可不可分二事也、恐非本旨。

［訓読］

○逸民は、伯夷、叔斉、虞仲、夷逸、朱張、柳下恵、少連。子曰く、其の志を降さず、其の身を辱めざるは、伯夷、叔斉か、と。柳下恵、少連を謂ふ、志を降し身を辱むるも、言は倫に中り、行は慮に中る、其れ斯れのみ、と。虞仲、夷逸を謂ふ、隠居して言を放(ほしいまま)にす。身は清に中り、廃は権に中る、と。

志を降すは、即ち身を辱むるなり。新安陳氏、伯夷の事を以て分けて二と為すは、非なり。柳下恵、少連は、志を降して身を辱しめ、而して言行能く中る。即ち其れ由由然として自ら処するを失はざるなり。其れ斯れのみ、斯れは言行を指し、和の取るべき所以の者は、惟だ言行の中に在るを言ふなり。双峰饒氏の説、之を得たり。虞仲、夷逸は隠居して独り善しとするは、即ち伯夷の清なる、言を放(ほしいまま)にして自ら其の用ふべからざるを示す。則ち言、先王の法に合せざる者多し。然れども自ら廃して以て其の清を成し、清にして中を得る者なり。故に清に中ると曰ひ、而して又た権に中ると曰ふ。六人の外、尚ほ朱張有れども其の事に及ばざる者は、闕文なるのみ。

我は則ち是に異なり、可も無く不可も無し、と。

諸逸民の事、皆な自ら以て可と為す者なり。可有れば則ち不可有り、皆な聖人に造ると雖ども、而れども未だ知るべからざるの神に至らざるなり。孔子のごときは則ち可も無く不可も無し、而して神化、測られず。尹氏の説、之を得たり。○南軒張氏謂ふ、夷、斉は不可有りと為す、下恵、少連は可有りと為す、と。致堂胡氏謂ふ、聖人は、可も無くして不可も無ければ、固に非ずと為す、不可も無くして可

も無ければ、流に非ずと為す、と。則ち皆な可、不可を以て二事に分つなり、恐らくは本旨に非ず。

［語釈］

○新安陳氏以伯夷之事分而爲二　『論語集注大全』微子篇・８章に、「其の君に非ざれば事へず。志を降さざること、見るべし。悪人の朝に立たず。身を辱めざること、見るべし」とある。伯夷（・叔斉）の「志を降さず」「身を辱めず」を君と仰ぐ人物でなければ出仕しない、悪人の朝廷には立たないの二つのことに分けて解釈したことを言うのであろう。

○言和之所以可取者　『孟子』万章章句下・１章に「伯夷は聖の清なる者なり。……柳下恵は聖の和なる者なり」とある。

○雙峰饒氏之説得之　『論語集注大全』微子篇・８章に、「双峰饒氏曰く、志を降し身を辱むれば、行、卑汚に似たり。但だ其の言、倫に中り、行、庸に中る。他人の志を降し身を辱むるに異なり。取るべき所の者、此くのごときのみ。使し倫慮に中らざれば、則ち志を降し身を辱むること、便ち好からず」とある。

○尹氏説得之　『論語集注大全』微子篇・８章に、「尹氏曰く、七人各おの其の一節を守る。而して孔子は則ち可も無く不可も無し。常に其の可に適ひて逸民の徒に異なる所以なり」とある。

○南軒張氏謂～下惠少連爲有可　『論語集注大全』微子篇・８章に、「南軒張氏曰く、……夷、斉の心のごときは、則ち未だ不可有るを免れず、下恵、少連は則ち未だ可有るを免れざるなり」と

ある。

○致堂胡氏謂～無不可而無可、爲非流　『論語集注大全』微子篇・８章に、「致堂胡氏曰く、……聖人、可も無くして不可も無きときは、則ち固に非ず。聖人、不可も無くして可も無きときは、則ち流に非ず。之を言ふこと平常のごときも、之を行ふこと実に未だ易からず。聖人は従容として道に中りて、偏倚する所無し。仁熟して自然に諸言語に発する者、此くのごとし」とある。

【九】

○大師摯適齊、亞飯干適楚、三飯繚適蔡、四飯缺適秦、鼓方叔入於河、播鼗武入於漢、少師陽、擊磬襄入於海。

太師摯、亞飯干、三飯繚、四飯缺、鼓方叔、播鼗武、少師陽、擊磬襄、皆賢人也。連茹並用、必在孔子爲魯司寇時。及其同時去位、亦必因孔子不用。而知魯日弱、非可仕之國也。摯干繚缺、猶爲貧而仕。故皆適諸侯之國。是時齊景公、楚昭王皆強政治、蔡昭侯復讐自立、秦惠公閉關自守。皆可託者也。故四賢往依焉。或亦從其所便歟。方叔武陽襄入河入漢入海者、則往而不返矣。詳見孔子圖譜。

［訓読］

○大師の摯（し）は斉に適（ゆ）く、亜飯の干は楚に適く、三飯の繚は蔡に適く、四飯の欠は秦に適く、鼓の方叔は河に入る、播鼗（はたう）の武は漢に入る、少師の陽、擊磬の襄は海に入る。

太師の摯、亜飯の干、三飯の繚、四飯の欠、鼓の方叔、播鼗の武、少師の陽、擊磬の襄は、皆な賢人なり。連茹して並びに用ひらるるは、必ず孔子の魯の司寇と為りし時に在らん。其の時を同じくして位を去るに及びては、亦た必ず孔子の用ひざるに因らん。而れども魯、日に弱くして、仕ふべきの国に非ざるを知ればなり。摯、干、繚、欠は、猶ほ貧たりて仕ふ。故に皆な諸侯の国に適く。是の時、斉の景公、楚の昭王皆な政治を強くし、蔡の昭侯復讐して自立し、秦の恵公関を閉ぢて自ら守る。皆な託すべき者なり。故に四賢往きて依らんとす。或いは亦た其の便とする所に従ふか。方叔、武、陽、襄、河に入り、漢に入り、海に入る者は、則ち往きて返らざるなり。詳しくは孔子図譜に見ゆ。

［語釈］

○孔子圖譜　佚書。陽貨篇第一章の［語釈］参照。

［校異］

○大師摯適齊　底本は「太師摯適齊」に作る。『論語』本文に従い、改めた。

【十】

○周公謂魯公曰、君子不施其親、不使大臣怨乎不以。故舊無大故、則不棄也。無求備於一人。

雙峰饒氏曰、前章逾河蹈海、是魯末世事。此章是魯初立國時。其待親賢也如此忠厚。末後却使樂工不能安其身。豈不可嘆。○記者敘此於樂工之後、蓋有意矣。

［訓読］

○周公、魯公に謂ひて曰く、君子、其の親を施(す)てず、大臣をして以(もち)ひられざることを怨ましめず。故旧、大故無ければ、則ち棄てず。備はらんことを一人に求むる無し、と。

双峰饒氏曰く、前章の河を逾へ海を蹈むは、是れ魯の末世の事。此の章は是れ魯の初めて国を立つる時。其の親賢を待するや此くのごとく忠厚なり。末後は却つて楽工をして其の身を安んずる能はざらしむ。豈に嘆ずべからざらん、と。○記す者、此を楽工の後に敘す、蓋し意有らん。

［語釈］

○雙峰饒氏曰～豈不可嘆　『論語集注大全』微子篇・10章。

【十二】

○周有八士。伯達、伯适、仲突、仲忽、叔夜、叔夏、季隨、季騧。

雙峰饒氏曰、四乳皆雙生、固爲異事。八子皆賢、尤異事也、故孔子稱之。可見周時氣數之盛。○鄭玄以爲成王時人、理或然也。觀記者敘於周公命魯公之後、意可知矣。命魯之辭、立國忠厚、則周公相成王時、天下皆有忠厚之風、而和氣所鍾、宜天生賢才之衆多也歟。

［訓読］

○周に八士有り。伯達、伯适、仲突、仲忽、叔夜、叔夏、季隨、季騧。

双峰饒氏曰く、四乳皆な双生するは、固に異事と為す。八子皆な賢なるは、尤も異事なり、故に孔子、之を称す。周の時、気数の盛んなるを見るべし、と。○鄭玄、以て成王の時の人と為すは、理として或いは然るなり。記す者、周公、魯公に命ずるの後に敘するを観れば、意、知るべし。魯に命ずるの辞、国を立つること忠厚なれば、則ち周公、成王に相たりし時、天下皆な忠厚の風有り、而して和気の鍾まる所、宜なり、天、賢才を生むことの衆多なるや、となり。

［語釈］

○四乳　乳は子を産むこと。四回のお産。

○雙峰饒氏曰～可見周時氣數之盛　『論語集注大全』微子篇・11章。

○鄭玄以爲成王時人　『論語集注大全』微子篇・11章に、「或ひとの曰く、成王の時の人、と。鄭玄が説」とある。

論語私存巻十八終